

博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成27年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

機関名	京都大学	整理番号	A01
プログラム名称	京都大学大学院思修館		
プログラム責任者	北野 正雄	プログラム コーディネーター	川井 秀一
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・計画を確実に実行しており、フォローアップなどの指摘事項にも真摯に対応し、プログラムの改善を図っている。 ・プログラムへの教員の熱心度、学生の満足度が高く、施設面など大学からのサポート体制も充実している。 ・一方、中間評価で指摘された、「総合生存学」の学理の確立、また学位授与基準の明確化については、教科書の作成などプログラムの進行とともに徐々に進んできているが、その進捗状況を適宜チェックしながら本プログラムに対して助言などを行っていくことが必要であると考える。 ・専門性の修得において一般的な学位授与基準を適用し、それに加えて八思、熟議、また国内外サービ斯拉ーニング（インターンシップ）、海外武者修行などを通じて社会的課題を認知・解決する力を修得させるプログラムとなっており、学位としての基準を明確化すると同時に、実践的リーダーを育てるよう工夫されているなど、その内容が充実してきている。 ・総合生存学について本プログラム担当教員による教科書の執筆がおこなわれ、刊行された。 ・既存の2棟の研修棟に続いて総合生存学館の新棟(4740平米)が平成26年12月に完成するなど、研究教育環境が大変充実している。 ・総合生存学館について広報活動が活発におこなわれているが、本プログラムへの応募学生数、受講学生数は未だ十分なレベルではない。ただし、厳格な選抜により受講学生の質は堅持されていると思われる。社会人学生数、女性学生数、留学生数の割合について改善がみられる。 ・学生の進路希望は最高学年では国際機関が多かったが、低学年においては、就職希望先が多様であることが認められた。 <p>2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「総合生存学」の学理が模索されているが、まだ必ずしも明確なものになっていないように思われる。その内容は多岐にわたるものであり、一つの独立研究科では充ち切れないのではないかと。特にその教育においては、総合生存学館と既存の研究科との役割分担を明確にしていく必要があると思われる。 ・学生からは、新しい研究科のもつ自由度と本プログラムが提供する機会をのびのびと活用して自身の総合力を付けてきている様子が見える。担当教員は、このような雰囲気を保ちながら、本プログラムの中心となる、「総合生存学」の学理の確立を図り、本プログラムの遂行及びその後のあり方について長期的なビジョンを確立していくことが求められる。 			

- ・熟議の内容、また八思の講義の専門性が高く理解しづらいということについて学生の不満があり、その改善が望まれる。特に後者に関しては、大学全体として、総合力を持った大学院生を育てられるよう、大学院の専門基礎科目のあり方を見直すことが求められる。
- ・学生の研究費、旅費等の補助の調整、また社会人学生、家族を持っている学生への経済的サポートの充実が望まれる。